

祖堂集卷第三

牛頭和尚、四祖に嗣ぐ。師諱は法融、潤州延陵の人なり。姓は文。

四祖、双峯山に在りて衆に告げて曰く、吾れ未だ此の山に至らざりし時、武徳七年に於いて、廬山の頂上に於いて、東北にして此の蘄州双峯山を望見するに、頂上に紫雲の蓋の如き有り、下に白氣の横に六道に分かれたる有り。四祖、五祖に問うて曰く、汝は此の瑞を知るや。五祖曰く、是れ師の脚下に横に一枝の仏法を出だすこと莫きや。四祖曰く、汝は我が意を会せり。汝善く住せよ。吾れは江東に過り、便ち去きて牛頭山の幽棲寺に至りて数百の僧を見たるに、並びに道氣無し。乃ち顧みて僧に問うて曰く、寺中に多少の住持有りや、其中に道人有りや。僧曰く、禅和大いに相い軽んず。夫れ出家なる者は阿那个は是れ道人ならざる。四祖曰く、何者か是れ道人なる。僧無對。乃ち云く、山上に懶融有り、身に一布裘を著け、僧を見るも合掌する解わず、此は是れ異人なり。禅師自ら往きて看よ。四祖乃ち往き、庵前に過ぎ去き過ぎ來たりして謂いて曰く、善男子、甚深三昧に入ること莫れ。融乃ち眼を開けり。四祖曰く、汝は學して為た求むること有りや、為た求むること無しや。融曰く、我れは法華經の開示悟入に依りて、某甲は修道を為す。四祖曰く、開なる者は何人を開するや、悟なる者は何物を悟するや。融無對。四祖曰く、西天二十八祖は仏心印を伝え、達摩大師、此の土に至りて相承するに四祖有り、汝還た知るや。融は此の語を警聞して乃ち曰く、融は毎常に双峯山を望んで頂礼するも、恨むらくは未だ親しく往きて面調することを得ず。四祖曰く、四祖を識らんと欲せば即ち吾が身是れなり。融便ち起ちて接足して礼して曰く、師は何に困りて此に降れるや。祖曰く、特に來たりて相い訪えり。又曰く、別に更に往處有りや。融は手を以て庵後を指して曰く、更に庵の在る有り。遂に四祖を引きて庵所に到れり。師遂に虎狼の庵を遶り、麀鹿の四畔に縱横するを見る。師乃ち兩手もて怕るる勢を作して云く、嶮。融曰く、師に猶お這個の在る有り。師曰く、適來、什摩を見しぞ。融は言下に於いて玄旨を承くると雖も而も對有ること無し。

師、是に於いて法要を為説して曰く、夫れ百千の妙門は同に方寸に歸し、恒沙の妙徳は尽く心源に在り。一切の定門、一切の慧門、

悉く自ら具足し、神通妙用、並びに汝が心に在り。煩惱業障は本来空寂、一切の果報は本来自ら有り。三界の出づ可き無く、菩提の求む可き無し。人と非人と、性相等。大道は虚曠にして思を絶し慮を絶す。是くの如きの法、汝は今已に得て、更に闕少する無くして仏と殊なること無く、更に別法の得て仏と成る可き無し。汝但だ心に任せて自在にして觀行を作すこと莫れ。亦た心を停むること莫れ。貪瞋癡を起すこと莫れ、愁慮を懐くこと莫れ、蕩蕩無碍にして、意に任せて縦横し、諸善を作さず、諸悪を作さざれば、行住坐臥、觸目遇縁、惣べて是れ仏の妙用にして快樂無憂なり、故に名づけて仏と為す。

融問つ、心は既に具足す、何者か是れ心なる、何者か是れ仏なる。師曰く、心に非ざれば心を問わず。心を問えば心ならずんば非ず。

又た問う、既に觀行を許さざれば、境の起る時に於いて如何んが対治せん。師曰く、境縁に好醜無し、好醜は心より起る。心若し強いて名づけずんば、妄情は何よりか起こらん。妄心既に起らざれば、眞心は遍知するに任す。心の自在なるに随つて復た始終なければ則ち常住法身無有變易と名づく。吾れ先師璨和尚の処より伝え得たる頓悟の法門、今汝に付す。汝は今諦受して以て吾が道に酬いよ。但だ此の山に住せよ。汝より向後更に五人有りて相繼いで絶えざらん。師は言下に於いて頓に微瑕を盪し、永く朕兆を亡せり。是れより靈恠鬼神は供須するに地無し。此を以て詳鑿は見るに足る。如來の密旨、豈に修証して以て能く齊しからんや。祖胤の玄門、安んぞ寂靜の趣むく可けん。言亡じて理契つ、玄要を顧みて以て雲泥とす。靜慮還源、禪樞を望みて而して楚越とす。

師に問う、夫れ聖人と言う者は、当た何法を断じ、当た何法を得して而して聖人と言つや。答つ、一法不断、一法不得、此れを聖人と謂う。進んで曰く、不断不得ならば、凡夫と何の異り有りや。師曰く、異り有り。何を以ての故ぞ。一切凡夫は皆な所断の妄計、所得の眞心有り。聖人は則ち本と所断無く、亦た所得無し。故に異り有りと曰う。進んで曰く、云何が凡夫は有所得にして聖人は無所得なる。得と不得とに復た何の異り有りや。師曰く、異り有り。何を以ての故ぞ。凡夫は有所得なれば則ち虚妄有り。聖人は無所

得なれば虚妄無し。虚妄有る者は則ち異り有り。虚妄無き者は則ち異り無し。進んで曰く、若し異り無くんば、聖人の名は何に因りて立つや。師曰く、凡と聖とは一俱に是れ仮名なり。仮名の中に二無ければ則ち異り有ること無し。龜毛兔角を説くが如きなり。進んで曰く、聖人若し龜毛兔角に同じければ則ち応に是れ無なるべし。人をして何物をか学ばしめん。師曰く、我れ龜毛を説くも、龜無しとは説かず。汝は何の意もて此の難を作すや。進んで曰く、龜は何物に喩え、毛は何物に喩うるや。師曰く、龜は道に喩え、毛は我に喩う。故に聖人は無我にして有道なり。凡夫は無道にして有我なり。我に執する者は猶お龜毛兔角の如し。

次いで乃ち法は智嚴に付し已る。現慶元年より、司空蕭無善請つて建初寺に出でしむ。師辞するも免れず。乃ち衆に謂いて曰く、今より一たび去りて再び踐まじ、と。既に山寺の門を出づるに、禽獸哀号し月を逾えて止まず。山間の泉池、激石湧砂して一時に填満せり。房前の大桐四株、五月に繁茂し、一朝にして凋し尽くせり。師現慶二年丁巳の歳正月二十三日に至り、建初寺に於いて歿せり。春秋六十四、僧夏四十一なり。二十七日に至りて葬す。塔は金陵後湖の溪籠山、即ち耆闍山に在り。

此に因りて牛頭宗は六枝なり。第一は是れ融禪師、第二智嚴、第三慧方、第四法持、第五智威、第六惠忠なり。

鶴林和尚、牛頭の威禪師に嗣ぐ、師諱は馬素、未だ行状を覩ざれば化縁の始終を決せず。大律師大和尚宝航の塔と勅諡す。

問う、如何なるか是れ西来意。師曰く、会すれば即ち会せず、疑えは即ち疑わず。師却つて云く、会せず疑わざる底、疑わず会せざる底。

僧有りて門を敲けり。師問う、是れ什摩人ぞ。対えて曰く、僧なり。師曰く、但だ僧のみには非ず、仏来たるも亦た著かず。進んで曰く、仏来たるに什摩と為てか著かざる。師曰く、此問には公の止泊する処無ければなり。

先の径山和尚、鶴林に嗣ぐ。師諱は道欽。大歴の年、代宗請つて京師に赴かしめ、国一禪師と号す。

肅宗皇帝来たりて師を礼す。師、帝の来たるも見て遂に立つ。帝曰く、大師、朕の来たるを見て、何に因りて起つや。師曰く、檀越、什摩なにに因りて四威儀中おに向いて貧道を見るや。

問う、如何なるか是れ祖師西来意。師曰く、汝の問いは当らず。曰く、如何にすれば当ることを得ん。師曰く、我れ死するを待ちて即ち汝に向つて道わん。

・待 その時になつたら。

江西馬大師、西堂をして師に問わしむ、十二時中、何を以て境と為すや。師曰く、汝の廻り去るを待ちて、信の大師に上る有らん。西堂曰く、如今便ち廻り去らん。師曰く、大師に伝語せよ、却つて須らく曹溪に問取して始めて得べし、と。

鳥窠和尚、径山国一禪師に嗣ぐ、杭州に在り。未だ行録を覩ざれば化縁の始終を決せず。

因みに侍者辞す。師問う、汝は何処に去くや。对えて曰く、諸方に向いて仏法を学び去る。師曰く、若し是れ仏法ならば、我が這裏も亦た小許有り。侍者便ち問う、如何なるか是れ這裏の仏法。師、一莖の布毛を抽いて示す。侍者便ち悟れり。

白舍人親しく心戒を受く。又の時に対坐して並びに言説無し。舍人の第三弟、此れを見て詩を造りて曰く、白頭の居士の禪師に対す、正に是れ楞嚴三昧の時。一物も也た無くして百味足る、恒沙能く有るも幾人か知る。

白舍人問う、一日十二時中、如何が修行せば便ち道と相応することを得ん。師云く、諸悪莫作、諸善奉行。舍人曰く、三歳の孩児も也た解く道い得ん。師曰く、三歳の孩児も也た解く道い得んも、百歳の老人すら略ぼ行い得ず。舍人は此れに因りて礼拝して師と爲し、讚して曰く、形は羸れ骨は瘦せて久しく修行す、一の納麻衣は道情に称う。曾つて草菴を結びて碧樹に倚れり、天涯も鳥窠の名有ることを知る。

・略行不得 少しも行い得ない。この話のものは、『梁高僧伝』十の耆域伝にある。

師、白舍人に問う、汝は是れ白家の児なりや。舍人は名を称すらく、白家の易なり。師曰く、汝の姍爺は姓は何ぞ。舍人無対。

・姍爺 おとつあん。

舍人帰京し、寺に入りて遊戯し、僧の経を念ずるを見る。便ち問う、甲子は多少ぞ。对えて曰く、八十五なり。進んで曰く、経を念じて幾年をか得たる。对えて曰く、六十年なり。舍人云く、大奇、大奇。此くの如しと雖然も、出家には自ら本分の事有り。作摩生そもんは是れ和尚の本分の事。僧無対。舍人、此れに因りて詩ありて曰く、空門に路有るも処を知らず、頭は白く齒は黄ばみても猶お経を念ず。何年飲著す声聞の酒、如今に至るに迄んで酔は未だ醒めず。

已上は空宗なり。

五祖忍大師下に一枝を傍出せり。神秀和尚、老安和尚、道明和尚なり。

神秀下に普寂あり。普寂下に懶瓚和尚ありて南岳に在り。師に樂道歌有りて曰く、兀然無事にして改換する無し、無事にして何ぞ須いん一段を論ずることを。眞心に散乱無し、他事は断ずるを須いず。過去は已に過去せり、未来は更に算うる莫し。兀然として無事に坐す、何ぞ曾つて人の喚ぶ有らん。外に向つて功夫を覓むるは、惣べて是れ癡頑の漢。糧は一粒をも蓄えず、飯に逢えば但だ餐

うを知るのみ。世間多事の人、相い趁つて渾て及ばず。我は生天を樂わず、亦た福田を愛です。飢え来たれば即ち飯を喫し、睡り来たれば即ち臥して瞑る。愚人は我を笑つても、智は乃ち賢を知る。是れ癡鈍ならず、本躰如然なり。去かんと要すれば即ち去き、住まらんと要すれば即ち住まる。身には一破納を被し、脚には嬢生の袴を著く。多言復た多語、由来反りて相い誤(原作悞)つ。若し衆生を度せんと欲せば、且く自ら度するに過ぐるは無し。謾りに眞仏を求むる莫れ、眞仏は見る可からず。妙性及び靈台、何ぞ曾つて勲練を受けん。心は是れ無事の心、面は是れ嬢生の面。劫石は移動す可きも、个中は改変すること難し。無事は本と無事、何ぞ須いん文字を読むことを。人我の本を削除し、箇中の意に冥合す。種種に筋骨を勞せんよりは、如かず林間に睡りて兀兀たらんには。頭を挙げて日の高さを見れば、飯を乞つて従頭に饑う。功を將て功を用うれば、展転して冥朦ならん。取れば則ち得ず、取らざれば自ら通ず。吾に一言有りて、慮を絶ち縁を忘る。巧説は得ず、只だ心を用いて伝つるのみ。更に一語有り、直に与つるに過ぐる無し。細きこと毫末の如く、本と方所無し。本自円成、機杼を勞せず。世事悠悠、山丘に如かず。青松は日を蔽い、碧澗は長に流る。藤蘿の下に臥す、塊石の枕頭。山雲は暮に当り、夜月は鉤と為る。天子に朝せず、豈に王侯を羨まんや。生死すら慮ること無し、更に何の憂をか須いん。水月無形、我れは常に只寧し。かめと万法皆な余り、本自無生。兀然として無事に坐し、春来たりて草自ら青し。

・ 不是癡鈍、本躰如然 癡鈍ぶつてるわけではない、もともとそうなのだ。

・ 嬢生 嬢は俗語で母親のこと。娘とも書く。母親から生まれたまま。生まれつき。また、天生の、本来的な。

・ 由来 もともと。

・ 个中 二じ。

・ 本自 自は語助。

老安国師、五祖忍大師に嗣ぐ、嵩山に在り。坦然禅師問つ、如何なるか是れ祖師西来の意旨。師曰く、何ぞ自家の意旨を問わざる。他の意旨を問つて什摩をか作す。進んで曰く、如何なるか坦然の意旨。師曰く、汝須らく密作用すべし。進んで曰く、如何なるか是

れ密作用。師、閉目し又た開目す。坦然禪師便ち悟れり。

騰騰和尚、安国師に嗣ぐ。師に樂道歌有り曰く、道を問わば道に修す可き無く、法を問わば法に問う可き無し。迷人は性空を了せず、智者は本と違順無し。八万四千の法門あるも、至理は方寸を離れず。広学多聞を要せず、弁才聡儻に在らず。自家の城廓を識取せよ、謾りに他の州郡に遊ぶこと莫れ。言語は性空を離れず、和光して塵空に同ぜず。煩惱は即ち是れ菩提、浄花は泥糞に生ず。若し人有つて問答せんことを求めなば、誰か能く他と共に講論せん。亦た月の大小も知らず、亦た歳の余閏も知らず。晨時には粥を以て飢えに充て、仲時には更に一頓を瀆す。今日は任運騰騰、明日は騰騰任運。心中には了として惣べて知るも、只没に癡を伴り鈍に縛らる。

破竈墮和尚、安国師に嗣ぐ。師、北地に在りて、一禪師有り、唯だ善く竈を塞ぐのみにして、頻頻として竈神の身を現わすことを感得せり。彼の地敬重すること仏像よりも劇し。是の時和尚、彼に至り、竈神の為に説法せり。竈神聞法し、便ち天に生まるることを獲たり。故に本身を現わして和尚に礼辞すらく、師の説法を蒙りて重ねて天に生まるることを得たり。故に來たりて師に謝して便ち天府に還る、と。言猶お未だ訖らざるに、瞥然として見えず。其の竈瓦解して悉く自ら落ちて破せり。此の師は本と名を称せず。此の縁に因るが故に破竈墮和尚なり。

已上は北宗なり。

靖居和尚、六祖に嗣ぐ、吉州に在り。師諱は行思、姓は劉、廬陵の人なり。曹溪の密旨を伝えてより、便ち廬陵に復り、群生を化度せり。

僧問う、如何なるか是れ仏法の大意。師曰く、廬陵の米は作摩價なりや。

師、神会に問う、汝は何方よりして来たるや。対えて曰く、曹溪より来たれり。師曰く、何物をか将ち得来たる。会は遂に身を震わせて示す。師曰く、猶お瓦礫を持す。会曰く、和尚の此間には、眞金(原作金眞)の人に与うる有ること莫きや。師曰く、設使有りて汝に与うるも、什摩処いずこに向つてか著おかん。

師は開元二十八年十二月十三日を以て遷化せり。弘濟禪師讚して曰く、曹溪門人、廬陵に出世す。唯だ一脉をのみ提げて、廻かに三乗を出づ。沢中の孤燭、火裏の片氷。君に許す妙会、説底と相応す、と。

荷沢和尚、六祖に嗣ぐ、西京の荷沢寺に在り。師諱は神会、姓は高、襄陽の人なり。

師、初めて六祖の処に到るや、六祖問う、是れ你遠来す、大いに艱辛す。還た本を将ち来たれるや。若し本有らば即ち合に主を識るべし。是れ你試みに説き看よ。師対えて曰く、神会は無住を以て本と為し、見るもの即ち是れ主なり。祖曰く、者この沙弥争でか取次に語らん。便ち杖を以て乱打す。師は杖下に思惟すらく、善知識は歴劫も逢うこと難し。今既に遇うことを得たり、豈に身命を惜しまんや、と。六祖は其の語の深情至れるを察す、故に之を試みしなり。此れに因りて心印を伝えてより、化を東都に演べ、其の宗旨を定めたり。南能北秀は神会より現われたり。曹溪の一枝を揚げ、始めて宇宙に芳しからしめたり。

天宝中、御史盧液、是れ北宗普寂の門徒にして奏すらく、会、徒を洛陽に聚む、と。玄宗徴して赴かしめ、駕幸して詔もて応じ、天顔に対することを得たり。言理允符し、聖情鄭重なり。有司、均州に量移す。至徳二年、肅宗勅して荊州に徙し、開元寺に住せしむ。師、郷信至りて父母俱に喪せることを報ぜり。師乃ち僧堂に入り、白槌して曰く、父母俱に喪せり、請う大衆、摩訶般若を念ぜよ、と。大衆纒かに坐するや、師曰く、大衆を勞煩せり、珍重、と。師は上元元年五月十三日歿せり。眞宗大師般若の塔と勅諡す。

慧忠国師、六祖に嗣ぐ。姓は冉、越州諸暨県の人なり。其の兒子にして家に在りし時、並びに曾つて語らず、又た曾つて門前の橋を過ぎず。直に十六に到りて、一個の禪師の來たる有り。纔かに望見するや、走り出て門前の橋を過ぎ、迎接して礼拝し、寒暄を通ぜり。父と阿孃と着屬と遠近隣舍惣べて來たり驚訝して曰く、不可思議なり、這個の兒子、養い來たりて十六に到るまで並びに曾つて他の語話するを見ず、又た曾つて他の門前の橋を過ぐるを見ず。今日纔かに和尚を見るや、是くの如き次第有り、恐らくは是れ此の兒子は常人に異なるならん、と。

兒子便ち禪師に問う、乞つ師、慈悲もて接受し、一個の衆生を度得せよ。某甲切に禪に投じて出家せんことを要む。禪師曰く、是れ我が宗門中は、銀輪王の嫡子、金輪王の孫子にして方始めて繼續して、此の門風を墜とさざることを得。是れ你三家村裏の男女にして、牛背上に將養やしなわるる底の兒子、作摩生か這個の宗門に投ぜん。是れ你が分上の事たらず。兒子曰く、禪師に啓す、是れ法は平等にして高下有ること無し。那んぞ這個の言詞有りて、某甲の善心を障えん。再び禪師の垂慈して容納せんことを乞えり。禪師は兒子に是くの如き次第有るを見て、便ち兒子に向つて説けり、你若し此くの如ければ、某に投じて出家することは則ち得ず。子曰く、什摩人に投じて出家せん。禪師、某甲の与に宗師を指示せよ。禪師曰く、汝は還た曹溪を聞きしや。子曰く、曹溪は是れ什摩の州界なるやを知らず。禪師曰く、広南の曹溪山に一善知識有り、喚んで六祖と作し、六百衆を匡(原作広)す。你は那裏に去きて出家せよ。某甲は未だ曾つて天台に遊ばず、你自ら但だ去け。

其の兒子便ち草に入りて隱遁し、爺孃を迴避して便ち行けり。三日の程は二日にして行き、兩日の程は一日にして行き、曹溪に到るに恰も祖師の正当説法の時に遇えり。便ち祖師を礼拝す。祖師問う、什摩処よりか來たる。對えて曰く、只だ近し。祖曰く、生縁は阿那裏にか在る。子曰く、五陰を得てより後に忘却せり。祖、師を招いて云く、近前來。子供ち近前す。祖師曰く、実説せば你は是れ什摩処の人なりや。子曰く、浙中の人なり。祖曰く、遠く來たりて這裏に到り、什摩事を為すや。子曰く、一つには則ち明師は遇つこと難く、正法は聞くこと難し、特に來たりて祖師に礼觀す。二つには則ち師に投じて出家せん。乞つ師、垂慈して接受せよ。祖

曰く、我れ侏に向つて道う、出家すること莫れと。子曰く、作摩に困りて此の言有るや。祖曰く、侏は是れ聖明にして干戈を動かさざるもの六十年の天子なり。是れ侏但だ天子と造り、仏法を主と為せ。子曰く、師に啓す、但だ六十年のみには非ず、百年の天子も也た要せず。乞う師、慈悲もて某甲の出家することを容許せよ。師便ち摩頂して授記して曰く、侏若し出家せば、天下に独立し、仏は便ち接受せん、と。

・阿嬢 おつ母さん。

・将養 二字で、やしなう。将は語調をゆるめる軽い接頭語。

・爺嬢 お父つつぁんとおつ母さん。

師は嘗つて南陽白崖山に在りて修行すること四十余年。上元二年正月十六日、勅を奉ず。肅宗皇帝徵詔し、上都に赴かしめ、千福寺の西禅院に安置す。後ち光宅寺に歸す。肅宗、代宗前後兩朝並びに親しく菩薩戒を受け、礼して国師と号せり。

僧問う、如何なるか是れ仏法の大意。師曰く、文殊堂裏の一万の菩薩。僧曰く、学人は会せず。師曰く、大悲千手千眼。

師定坐する次いで、肅宗問う、師は何法を得たるや。師曰く、陛下は空中の一片の雲を見るや。皇帝曰く、見る。師曰く、釘釘著せるか、懸掛著せるか。

・空中一片雲 伝灯録八南泉章参照。

帝又た問う、如何なるか是れ十身調御。師乃ち起立して云く、還た会するや。帝曰く、会せず。師曰く、老僧が与に浄瓶の水を過し来たれ。

耽源問う、師の百年の後、忽し人有りて極則の事を問わば、如何んが他に向つて道わん。師曰く、幸自に何怜生、个の護身の符子を得んことを要須めて什摩をか作す。

・幸自 自は語助。

・何怜生 立派である。

肅宗因みに從侍の師を肩舁して上殿せしむ。師乃ち仰面して視て曰く、還た会するや。帝曰く、会せず。師曰く、老僧今日困れたり。

帝問う、如何なるか是れ無諍三昧。師曰く、檀越、毘盧頭上を踏みて行け。帝曰く、如何なるか是れ毘盧頭上を踏みて行く。師曰く、自己をば清淨法身なりと認むること莫し。

・踏毘盧頭上行 己自分の頭を踏んつけて行きなさい。

師、一日に於いて、耽源の法堂に入るを見る。師便ち一足を垂る。耽源便ち出で去り、良久して廻り來たる。師曰く、適來は意作麼生。對えて曰く、阿誰にか向つて説かば即ち得たる。師曰く、我れ徐に問えり。對えて曰く、什摩処にか某甲を見し。

肅宗帝問訊する次いで、師は帝を視ず。帝曰く、朕が身は一國の天子なり、師は何ぞ殊に些子の朕を視ること無きを得たる。師云く、皇帝は目前の虚空を見るや。帝曰く、見る。師曰く、還た曾つて眈眼して陛下に向いしや。

魚軍客問う、師白崖山に住せし時、如何んが修行せる。師、家童子を喚ぶ。童子来たれり。師は乃ち手を以て童子の頭を摩して曰く、惺惺として直に惺惺たりと言ひ、曆曆として直に曆曆たりと言ひ、以後、人の謾を受くること莫かれ。

南陽の張漬問う、某甲、無情説法有ることを聞くも、未だ其の事を諦めず。乞つ師、指示せよ。師曰く、無情説法は、汝若し聞く時は方に無情説法を聞くも、他の無情に縁りて始めて我が説法を聞くことを得ん。汝但だ無情説法を聞取し去れ。張漬曰く、只だ如今は有情方便の中に約するのみ。如何なるか是れ無情の因縁。師曰く、但だ如今は一切動用の中に於いて施為す。但だ凡聖の両流は都べて小分の起滅も無し。便ち是れ識を出でて有情に属せず。熾然として見覚するも、只だ是れ其の繋執無し。所以に六根は色に對して、分別は識に非ず。

師、黨子谷に在りし時、麻谷来たりて師を繞ること三匝し、震錫一下す。師曰く、既然に任麼なれば、何ぞ更に貧道を見んことを用いん。又た震錫一下す。師呵して曰く、這の野狐精。長慶代つて曰く、大人是れ什摩の心行ぞ。又た代つて曰く、若し与摩ならざれば、争でか和尚を識得せん。

・心行 不用意に痕跡を残すような言行を批判的にいう場合に使う。

師、紫璘法師と共に論議する次いで、各おの登坐し了る。法師曰く、請う師、立義せよ、某甲は則ち破せん。師曰く、豈に与摩の事有りや。法師曰く、便ち請う、立義せよ。師曰く、立義し了れり。法師曰く、是れ什摩の義をか立てし。師曰く、果然して見ず、公が境界には非ず。長慶代つて曰く、師は義墮せり。

座主有り来たり参ずる次いで、師問う、什摩の事業をか作す。對う、金剛經を講ずる業なり。師曰く、最初の兩字は是れ什摩の字

ぞ。对えて曰く、如是なり。師曰く、是れ什摩ぞ。

師、璘供奉に問う、仏は是れ什摩の義ぞ。对えて曰く、仏は是れ覺の義なり。師曰く、仏は還た曾つて迷いしや。对えて曰く、曾つて迷わず。師曰く、既に曾つて迷わず、覺を用いて什摩をか作す。無对。

供奉又た問う、如何なるか是れ実相の義。師曰く、虚なる底を将ち来たれ。对えて曰く、虚なる底は不可得なり。師曰く、虚なる底すら尚お不可得なるに、実相を問うて什摩をか作す。

師は又の時に僧の来たるを見、手を以て円相を作り、円相中に日の字を書けり。僧無对。

有る時王詠問う、如何にしてか解脱を得ん。師曰く、諸法の相い知らざるとき、当処に解脱を得。詠曰く、若し然らば即ち是れ断なり。豈に是れ解脱ならんや。師便ち喝して曰く、この漢、我は徐に向かつて相い知らずと道えり、誰か汝に向つて断すと道いし。王詠更に言無し。和尚は亦た此の人は是れ三教の供奉なることを識れり。

王詠の門徒志心問う、如何にしてか成仏することを得去らん。師曰く、仏と衆生とを一時に放却すれば当処に解脱せん。進んで曰く、如何にしてか相応することを得去らん。師曰く、善悪都へて思量すること莫くんば、自然に仏性を見ることを得ん。又た問う、若^い為^かにして法身を得證するや。云く、毘盧遮那境界を超ゆ。進んで曰く、清浄法身、如何にしてか超え得ん。師曰く、仏に著して求めず。

・不著仏求 維摩經不思議品「夫求法者、不著仏求、不著法求、不著衆求」。

又た問う、阿那个か是れ仏。師曰く、即心即仏。進んで曰く、心には煩惱有り、如何にしてか是れ仏なる。師曰く、煩惱は性として自ら離す。進んで曰く、豈に煩惱を断ぜざるや。師曰く、煩惱を断ずるは是れ声聞縁覺なり。若し煩惱の不生なるを見なば大涅槃と名づく。

代宗又た一大白山人を引き来たりて和尚に見えしめて曰く、此の山人は甚だ見知有り。師問う、何の芸業を解くするや。代宗曰く、山を識り地を識り、字を識り算を解くす。和尚借問す、山人の住する所は是れ雌山なりや、是れ雄山なりや。山人久しくして答えず。又た問う、地を識るや。山人曰く、識る。師則ち殿上の地を指して曰く、此は是れ何の地ぞ。山人曰く、弟子の算するを容せば、方めて乃ち知ることを得ん。又た問う、字を識るや。対えて曰く、識る。師は地上に向いて劃して一の字を作して問う、此は是れ何の字ぞ。対えて曰く、此は是れ一の字なり。師曰く、土上に一を著けば是れ王の字なり、是れ什摩の一の字ぞや。又た問う、算を解くするや。対えて曰く、解くす。師曰く、三七は是れ多少ぞ。対えて曰く、和尚は弟子を弄ぶ、三七は二十一なり。師曰く、却つて是れ山人の貧道を弄ぶ。三七は是れ十なり。喚んで二十一と作すは豈に貧道を弄ぶに非ずや。又た問う、山人は更に何業を会するや。山人曰く、更に有るも実に敢えて対えず。師曰く、縦い汝惣べて解くするも亦た貴ぶに足らず。師却つて代宗に謂いて曰く、山を問えば山を識らず、地を問えば地を識らず、字を問えば字を識らず、算をとえば算を解くせず。何処より這今の朦漢を引き得來たるや。代宗、山人に向つて曰く、朕は国位有りと雖も未だ宝と為さず、和尚は是れ眞の宝なり。山人曰く、陛下は眞に宝を識る人なり。

時に十月中旬、諸の座主有りて来たりて和尚を礼拝せり。師問う、城外に草は何色をか作せる。対えて曰く、黄色を作せり。師遂に少童子を喚んで問う、城外に草は何色をか作せる。対えて曰く、黄色を作せり。師曰く、座主は經を解し論を解するに、此の厮兒と見解何ぞ殊ならん。座主却つて和尚に問う、城外に草は何色をか作す。師曰く、天上の鳥を見るや。座主曰く、和尚は転た更に勿

交渉なり。願わくば和尚、某等をして作麼生かして即ち是たらしめよ。師却つて座主を喚ぶ、向前し来たれ。座主一時に向前し来たれり。師、諸の座主の会せざるを見、遂に笑つて曰く、諸座主且らく寺に歸り、別日に却来せよ。諸大徳は嘿然として往き、明日又た来たりて願うらく、和尚、某等の為に説き看よ。師曰く、見るときは即ち見る。若し見ざれば、縦い説得出するも亦た見るを得じ。諸供奉曰く、從上の国師に未だ和尚の是くの如き機弁に似るを得るもの有らず。師曰く、他家は即ち国に師たり、貧道は即ち国の師なり。諸の供奉曰く、我等諸人は謾りに供奉と作りて、自ら経を解し論を解すと道つも、他の禪宗に扱らば都べて勿交渉なり。

南方の禪客有り問う、如何なるか是れ古仏心。師曰く、牆壁瓦礫、無情の物、並びに是れ古仏心なり。禪客曰く、経と太だ相違す。故と涅槃經に曰く、牆壁瓦礫、無情の物を離る、故に仏性と名づく。と。今は云う、一切無情皆な是れ仏心なり、と。未審し、心と性と為た別なるか別ならざるか。師曰く、迷人は即ち別なるも、悟人は即ち別ならず。禪客曰く、又た経と相違す。故と経に曰く、善男子、心は仏性に非ず、仏性は是れ常、心は是れ無常なり、と。今は曰う、別ならず、と。未審し、此の義如何ん。師曰く、汝は語に依りて而して義に依らず。譬えば寒月に水を結びて氷と為し、暖時に至るに及んで氷を積きて水と成し、衆生悟る時は心を積きて性と成す。汝若し定んで無情に仏性無しと執すれば、経に応に言つべからず、三界唯心、万法唯識と。故に華嚴經に曰く、三界の所有る法は一切唯心造なり、と。今且らく汝に問う、無情の物は為た三界の内に在りや、為た三界の外に在りや、為復是れ心なりや、為復是れ心ならざるや。若し心に非ざれば、経に応に三界唯心と言つべからず。若し是れ心ならば心に無情に仏性無しと言つべからず。汝自ら経に違つ、吾れは違わざるなり。

禪客曰く、無情既に有心なり、還た解く説法するや。師曰く、他は熾然として説く。恒説常説して間歇有ること無し。禪客曰く、某甲は什摩と為てか聞かざる。師曰く、汝自ら聞かざるのみ、他の聞く者有るを妨ぐ可からず。進んで曰く、誰人か聞くことを得る。師曰く、諸聖聞くことを得。禪客曰く、与摩ならば即ち衆生は心に分無かるべし。師曰く、我れは衆生の為に説く、他の諸聖の為に説く可からず。禪客曰く、某甲は愚昧聾瞽にして無情説法を聞かず。和尚は是れ人天の師と為りて般若波羅蜜多を説く、無情説法を聞

くことを得るや。師曰く、我れも亦た聞かず。進んで曰く、和尚は什摩と為てか聞かざる。師曰く、頼いに我れは無情説法を聞かず。我れ若し無情説法を聞かば、我れは則ち諸聖に同じ。汝は若為んぞ我れを見、及び我が説法を聞くを得んや。禪客曰く、一切衆生は畢竟して還た無情説法を聞くを得るや。師曰く、衆生若し聞かば即ち衆生に非ず。

禪客曰く、無情説法に還た典拠有りや。師曰く、言、典に關らずんば、君子の説く所には非ず。汝豈に見ずや。弥陀經に云く、水鳥樹林皆な是れ念仏し念法し念僧す、と。鳥は是れ有情なるも、水及び樹は豈に是れ有情ならんや。又た華嚴經に云く、刹説衆生説三世一切説、と。衆生は是れ有情なるも、刹は豈に是れ有情ならんや。客曰く、既に是れ無情に仏性有り、未審し有情は又た如何ん。師曰く、無情すらも尚お尔り、豈に況んや有情をや。禪客曰く、若し有情無情俱に仏性有らば、有情を殺して其の身分を食噉せば、即ち罪怨を結びて相い報ず。無情を損害して、五穀、菜蔬、菓栗等の物を食噉するも、罪有りて互いに相い讎報するを聞かざるなり。師曰く、有情は是れ正報にして、無始劫より來た虚妄にして顛倒し、我と我所とを計して而して結恨を懐けば、即ち怨報有り。無情は是れ依報にして、顛倒の結恨心無し、所以に報有りと言わず。客曰く、經教中には但だ有情のみ三菩提の記を授けられ、未來世に於いて作仏して、号して某等と曰うを得るを見るも、無情は菩提の記を授けられ、作仏するの処を見ず。只だ賢劫千仏中、阿那个は是れ無情成仏なりや。請う為に之を示せ。師曰く、我れ今、汝に問わん、譬えば皇太子の王位を受くる時の如き、為た太子一身のみ王位を受くるや、為復國界の一一受くるや。對えて曰く、但だ太子のみをして王位を受得せしむるも、國土の一切は自ら王に屬せば、寧当いずくんぞ別に受けんや。師曰く、今の此も亦た尔り。但だ有情のみをして授記せらしむるも、作仏の時、三千大千世界、一切國土は悉く毘盧遮那仏身に屬す。仏身の外、那ぞ更に無情有りて而して授記を得る有らんや。客曰く、一切大地既に是れ仏身ならば、一切衆生は仏身上に居り、便利して仏身を穢汚し、穿鑿して仏身を踐踏す。豈に罪無からんや。師曰く、一切衆生は全て是れ仏身なり、誰か罪を為さん。客曰く、仏身は無為にして罣碍する所無し。今、有為質碍の物を以てして而して仏身と作す、豈に聖旨に乖かざらんや。師曰く、汝は今見ずや、大品經に曰く、有為を離れて而して無為を説く可からず、又た無為を離れて而して有為を説く可からず、と。汝は色はれ空なることを信するや。對えて曰く、仏の誠言、那ぞ敢えて信せざらん。師曰く、色既に是れ空なれば、寧ぞ罣碍有

ら。

又た問う、衆生と仏と既に同じければ、只だ一仏の修行を用て一切衆生は応に一時に解脱すべし。今は尔らざるを見る、同の義は何にか在る。師曰く、汝見ずや、華嚴經中の六相の義、同中に異有り、異中に同有り、成中に壞有り、壞中に成有り。惣中に別有り、別中に惣有り、と。衆生と仏とは同一性なりと雖も、各各自修自得することを妨げず。他人の食するを見るも終に自ら飽かず。

又た問う、古徳曰く、青青たる翠竹は尽く是れ眞如、鬱鬱たる黄花は般若に非ざるは無し、と。有る人は許さず、是れ邪説なりと。亦た有る人は信じて言う、不可思議なりと。若なるかを知らず。師曰く、此は蓋し普賢文殊大人の境界にして、諸の凡小にして能く信受するには非ず。皆な大乘了義經の意と合す。故に華嚴經に云く、仏身は法界に充滿し、普く一切群生の前に現われ、縁に隨い感に赴いて周ねからざるは靡きも而も恒に此の菩提の座に処る、と。翠竹は既に法界を出でず、豈に法身に非ざらんや。又た摩訶般若經に曰く、色無辺なるが故に般若無辺なり、と。黄花は既に色を越えず、豈に般若に非ざらんや。此れ深遠の言なれば、省せざる者は意を措くことを為すこと難し。

又た問う、善知識有りて言く、学道の人、但だ本心を識得し了れば、無常來たる時、鷓鴣子も抛却して一辺に著き、靈台覺性迥然として去る。名づけて解脱と為す、と。此れ復た若為ん。師曰く、此は猶お未だ二乗外道の量を離れず。二乗の人は皆な有為生死を厭離して無余涅槃を欣樂す。老子も亦た曰く、吾に大患有るは、吾に身有るが為なり、と。冥諦を欣樂して而して至道と為し、乃ち冥諦に趣く。須陀洹人は八万劫、斯陀含人は六万劫、阿那含人は四万劫、阿羅漢人は二万劫、辟支仏は十千劫、定中に住す。外道も亦た八万大劫、非想非非想天に住す。二乗は劫満ちて猶お廻心向大するも、外道は劫満つるも生死に輪廻するを免れず。

・無常 死をいう。

・鷓鴣子 穀漏子に同じ。身体をいう。

又た問う、一切人の仏性は為復一種なりや、為復別有りや。師曰く、一種なることを得ず。進んで曰く、云何んが別有る。師曰く、有る人の仏性は全く生滅せず、有る人の仏性は半ば生滅し、半ば生滅せず。進んで曰く、誰人の仏性、全く生滅せず、誰人の仏性、半ば生滅し、半ば生滅せざるや。師曰く、我が此間の仏性は全く生滅せず、彼の南方の仏性は半ば生滅し、半ば生滅せず。進んで曰く、和尚の仏性は若^{いか}為にしてか全く生滅せず、南方の仏性は若^{いか}為にして半ば生滅し、半ば生滅せざる。師曰く、我がの仏性は身心一如にして、身外無余なり。所以に全く生滅せず。南方の仏性は、身は是れ無常、心性は是れ常なり。所以に半ば生滅し、半ば生滅せざるなり。進んで曰く、和尚の身は是れ色身なり、豈に便ち法身の不生滅なるに同じきを得んや。師曰く、汝は今那んぞ邪道に入るを得たるや。禪客曰く、某甲早^い晩^つ邪道に入りしや。師曰く、金剛經に曰く、若し色を以て我を見、音声を以て我を求むれば、是の人は邪道を行じて如来を見る能わず、と。汝既に色もて我を見ることを作せり、豈に邪道に入るに非ざらんや。是に於いて禪客は作礼して嘆じて曰く、和尚の此の説は、事に尽くさざるは無く、理に周かざるは無し。某甲若し和尚に遇わざれば、空しく一生を過ししならん。

肅宗皇帝問つ、一切衆生は忙忙たる業性あり、本の拠る可く無く、日に用いて知らず、此の意如何ん。師、金花の疊子を拈起し、帝に向つて曰く、喚んで什摩と作すや。帝曰く、金花の疊子なり。師曰く、灼然たり、是れ一切衆生は日に用いて知らざること。

伏牛和尚、馬大師の与に書を送りて師の処に到る。師問う、馬師は何法を説きて人に示すや。対えて曰く、即心即仏、と。師は曰く、是れ什摩の語話ぞ。又た問う、更に什摩の言説か有る。対えて曰く、非心非仏、と。亦た曰く、不是心、不是仏、不是物、と。師笑つて曰く、猶お些子を較す。

・猶較些子　いまひとつ足りない。あるいは、まあまあのことだ。

伏牛却つて問う、未審しづかし、此間すかんは如何ん。師曰く、三点は流水の如く、曲りて刈禾の鎌に似たり。後、人有りて仰山に拳似す。仰山云く、水中に半月現わる。又た曰く、三点は長流水、身は魚竜の衣に似たり。

・ 三点如流水云云 心字をいう。

肅宗皇帝問う、一切衆生は忙忙たる業性あり、本の抛る可く無く、日に用いて知らず、三界を出離するを得るに由無し。乞う師、方便して弟子と衆生をして生死より離れしめよ。師便ち三個の鈔羅を策めて水を盛り著し、蟻子を討めて便ち水裏に抛放せり。蟻子は水中に在りて遶転すること西三匝し、困つかれりて中心に浮在して死活を定めず。帝礼拝して曰く、乞う師慈悲せよ。師又た一草を策めて水裏に抛放せり。其の蟻子は驚訝して草に依り、便ち鈔羅の外に上れり。皇帝豁然として便ち悟れり。

代宗皇帝問う、師の百年の後は、个の什摩をか要する。師曰く、老僧が与に个の無縫塔を造れ。帝乃ち踞跪して曰く、師の塔様を請う。師良久す。帝、措く罔し。師曰く、吾に付法の弟子有りて就源に在り、却つて此の事を諳れば他に問取し去れ。国師の順世せし後、帝乃ち就源に詔して此の因縁を拳して問う、此の意如何ん。就源乃ち偈を作りて曰く、湘の南、潭の北、中に黄金の一国に充つる有り。無影樹下の合同船、瑠璃殿上に知識無し。

・ 無縫塔 ひびや継ぎ目ひとつない石塔。

師は大曆十年十二月九日歿す。代宗、大證禪師と諡号す。淨修禪師讚して曰く、唐朝の国師、大いに洪猷を繕く。曹溪に月を探り、渭水に舟に乗る。二天は偈を請い、四衆は籌を抛く。法才は極瞻し、大耳は暫羞す。

岷多三藏、六祖に嗣ぐ。師は天竺の人なり。行きて太原定襄県の曆村に至り、秀大師の弟子の草を結びて庵と為し、独坐して觀心

するを見たり。師問う、什摩をか作す。対えて曰く、看静す。師曰く、看る者は何人ぞや、静むる者は何物ぞや。僧遂に起ちて礼拝して問う、此の理如何ん、乞う師、指示せよ。師曰く、何ぞ自ら看ざる、何ぞ自ら静めざる。僧無对。師は根性遅廻なるを見て乃ち曰く、汝が師は是れ誰ぞ。対えて曰く、秀和尚なり。師曰く、汝が師は只だ此の法をのみ教うるや、為当別に意旨有りや。対えて曰く、只だ某甲をして看静せしむるのみ。師曰く、西天下には劣下道の習う所の法なり。此の土以て禅宗と為すは也大いに人を誤まつ。其の僧問う、三藏の師は是れ誰ぞ。師曰く、六祖なり。又た曰く、正法は聞くこと難し。汝は何ぞ彼中かちに往かざる。其の僧は師の提訓を聞きて便ち曹溪に去きて、礼して六祖に見え、具さに上事を陳べたり。六祖曰く、誠に崛多の言う所の如し。汝は何ぞ自ら看ず、何ぞ自ら静めざる。誰をしてか汝を静めしめん。其の僧言下に大悟せり。

智策和尚、六祖に嗣ぐ、務州に在り。師は曹溪の密旨に契いてより、物外に逍遙し、小節に拘せず。未だ化縁の始終を決せず。

師、北地に遊び、五祖下の智皇禅師の二十年修行せるに遇見せり。師遂に問う、此間すかんに在りて什摩なにをか作す。対えて曰く、入定す。師曰く、入定する者は為た有心にして入定するや、為た無心にして入定するや。若し有心にして入定すれば即ち一切有情は悉く皆な有心なれば、亦た合に定を得べし。若し無心にして入れば、一切無常も亦た合に定を得べし。智皇曰く、吾れ正に入定するの時、有無の心を見ず。師曰く、若し有無の心を見ざれば即ち是れ常定なり、応に更に出入有るべからず。智皇無对。却つて問う、汝の師は是れ誰ぞ。師曰く、六祖なり。汝の師は何法を以て禅定と為すや。師曰く、妙に円寂を湛えて、体用如如。五陰本と空にして、六塵は有に非ず。出でず入らず、定せず乱せず。禅性は無住にして、禅寂に住することを離る。禅性は無生にして、禅相を生ずることを離る。心は虚空の如くして、亦た虚空の量の如し。皇は此の説を聞くも未だ疑情を息めず。遂に錫を震つて南行し、直に曹溪に往きて、礼して六祖に見えたり。六祖も乃ち亦た上の如くに説けり。智皇禅師は言下に大悟せり。竜神、其の夜、旧の住庵の処の檀越に報じて曰く、智皇禅師、今夜得道せり、と。

司空山本淨和尚、六祖に嗣ぐ。師、姓は張、絳州の人なり。

僧問つ、奇特の事如何ん。師曰く、一念心の喜無し。僧曰く、豈に喜無きことを得んや。師曰く、喜は是れ阿誰が分上の事ぞ。

天宝三年、勅して中使楊光庭をして司空山に往きて恒春藤を採らしむ。寺中に到り、禪師の院に去きて語話する次いで、禪師に問うて曰く、弟子、生死事大、一心に道を慕う、願わくば和尚慈悲して救度せられよ。師曰く、大夫は京城より来たれり。帝王の地は禪伯甚だ多ければ彼処にて之を問え。某甲は老病にして一に知解無し。中使は礼を設けて再び請えり。師曰く、為当仏を求むるや、為復道を問うや。若し作仏せんことを求めば、即心是れ仏なり。若し道を問わんと欲せば、無心是れ道なり。中使は会せずして再び之を説かんことを請えり。師又た曰く、若し仏を求めんと欲せば、即心是れ仏なり。仏は心に困りて得。若し無心を悟らば仏も亦た無仏。若し道を会せんと欲せば、無心是れ道なり。中使曰く、京城の大徳は皆な布施持戒、忍辱苦行等もて仏を求めしむ。今和尚は曰く、無漏の智性、本自具足す。本来清淨、修行を仮らず、と。故に知る、前には虚しく功を用いしのみなることを。中使、京城に到りて恒春藤を進め訖り、遂に口もて禪師を奏し、具に上事を陳べたり。帝乃ち之を聞き、勅して中使をして却つて往かしめ、詔を伝えて禪師を取らしむ。天宝三年十二月十七日、京に到りて参じ訖れり。帝は勅して白蓮花亭子に於いて安置せり。正月十五日、勅して京城内の大師大徳をして禪師と道を論ぜしむ。禪師奏して曰く、山僧は久しく病みて談論するに暇無し。繁辞を仮らず、要を以て之を言わん。安問せば敢えて対えん、と。

秦平寺遠禪師なる有りて問うて曰く、聖人に対して敢えて繁詞せず、何者をば道と為すや。師曰く、道は本と無名、心に困りて道と名づく。心と名と若し有ならば、道は窮虚ならず。然して名と心と若し無ならば、道は何に憑りてか有ならん。一俱に虚妄にして、総べて是れ仮名なり。

問つ、見に身心有り、是道なりや。師曰く、小僧は身心本来是れ道なり。

・是道已不 已不は句末について疑問を表わす。以不、也無、也未などと同じ。

問う、適来曰く、無心是れ道なり、と。今は言つ、身心本来是れ道なり、と。豈に相違するに非ずや。師曰く、無心是れ道とは、心混じて道無く、心道一如なり、故に曰く、無心是れ道なり、と。身心本来是れ道とは、道も亦た本と是れ身心にして、身心は本と既にはれ空なれば、道も亦た源を窮むれば有ならず。遠公曰く、渺小の山僧、還た道理を会するや。師曰く、大徳は只だ山僧が相を見るのみにして無相を見ず。相を見る者は是れ大徳の見る所。故に云く、凡そ所有る相は皆な是れ虚妄なり、と。若し諸相は相に非ずと見れば即ち其の道を悟らん。若し相を以て実と為さば、劫を窮むるとも得る可からず。

・故云云 金剛經。

問う、今の山僧の相を見て山僧の無相を見ざる、請う、相中に於いて無相の理を説くことを為し看よ。師曰く、浄名曰く、四大は無主、身も亦た無我なり、と。今即ち我所の見無ければ道と相応す。大徳、若^{もし}以四大有主ならば、主は即ち是れ我なり。若し我見有らば、恒沙劫中にも会得す可からず。

是の日聖人は大いに悦び、朝士は忻然たり。

師乃ち四大無主偈ありて曰く、四大は無心なること復た水の如く、曲に遇い直に逢うも彼此無し。浄穢両処に心を生ぜず、壅決何ぞ曾つて二意有らん。境触但だ似る水の無心なるに、世に在りて縦横するに何事か有らん。

又た香山の僧慧明問う、無心是れ道ならば、瓦礫も無心なれば亦た応に是れ道なるべし。又た曰く、身心是れ道ならば、四生六類皆な身心有り、悉く是れ道なりや。若し見聞有らば、請う、聖に対して説け。師曰く、大徳、若し見聞覚知の鯨(原作者)を作さば是れ求道の人に非ず、道と殊に相応せず。經に曰く、無眼耳鼻舌身意、と。眼耳すら尚お無し、見聞覚知、何に憑りて有りと説かん。本

を窮むるに有らず、何処にか心を存せん。若し無心を会すれば、草木に同じからず。恵明無對。

師遂に見聞覚知の偈ありて曰く、見聞覚知に障碍無く、声香味触は常に三昧。鳥の空中に只没に飛ぶが如く、取無く捨無く憎愛無し。若し応ずる処に本と無心なることを会すれば、方めて名づけて觀自在と爲す。

・ 只没飛　ただ飛ぶだけ。

又た白馬寺の恵心問う、禪師は無心是れ道なりと説けり。師曰く、然り。問うて曰く、道既に無心なるに、仏は有心なりや。仏と道とは是れ一なるか是れ二なるか。師曰く、不一不二なり。問う、仏は衆生を度す、有心なるが爲の故に、道は人を度せず、無心なるが爲の故に。一は度し、一は度せず、是れ二なるか是れ一なるか。師曰く、此は是れ大徳、妄りに二見を生ず。山僧は然らず。何となれば、仏は是れ虚名にして、道も亦た妄立なればなり。二俱に不実にして都べて是れ仮名なり。一仮の中に何の二をか立てん。又た問う、仏と道と縦い是れ仮名なるも、名を立つる時に當つて是れ誰か立つることを爲す。若し立つる者有らば、何ぞ無しと言つことを得ん。師曰く、仏と道とは心に因りて立つ。心の本を推窮するに心も亦た是れ無し。二俱に虚妄にして尚お花鬘の如し。即ち本空を悟りて強いて仏道を立つるなり。是に於いて恵眞讚して曰く、事は尽くさざる無く、理は備わらざる無し。此は是れ頓見の眞門にして即心是仏なり。後世の衆生の与に軌則たる可し。

師の無修偈に曰く、道を見て方めて道を修す、見ずして復た何をか修せん。道性は虚空の如く、虚空は何処にか修せん。遍く修道者を觀るに、火を撥して浮嘔を覓む。但だ傀儡を弄するを看よ、線断たるれば一時に休す。

法空禪師問うて曰く、仏と道とは尽く是れ仮名妄立ならば、十二部經も亦た心に不実なるべし。従前の尊宿は代代相承して皆な修道を言つ、総べて是れ妄なりや。師曰く、然り。十二部教は皆な道に合するも、禪師は錯つて会し、道に背いて教を逐う。道は本と無修にして、禪師は強いて修す。道は本と無作にして、禪師は強いて作す。道は本と無事にして、強いて多事を生ず。道は本と無為

にして、中に於いて強いて為す。道は本と無知にして、中に於いて強いて知る。此の如き見解自ら是れ会せず。須らく自ら之を思つ可し。

師の背道逐教偈に曰く、道体は本と無修、修せずして自ら道に合す。若し修道の心を起さば、此の人は未だ道を会せず。一眞性を棄却して、却つて開浩浩なるに入る。忽ち修道の人に逢わば、第一道に向ふこと莫れ。

・第一 禁止を表わす語の上について、禁止の意味を強める。

又た福先寺安禅師問う、道は是れ仮名、仏も亦た妄立、十二分教は人を接するの方便にして一切は総べて妄ならば、何を以てか眞と為さん。師曰く、妄有るが為の故に眞を將て妄に対す。妄性を推窮するに本来空寂なれば、眞も亦た何ぞ曾つて更に実体有らん。座下の衆人悉く皆な頓悟せり。

又た問う、一切是れ妄にして、妄は亦た眞に同じ。眞妄に殊無くんば復た何物ぞ。師曰く、若し何物と言わば、此れも亦た是れ妄なり。道に相似無く、道に比竝無し。道に譬喩無く、道に対治無し。道と言つ者は言を以て理を詮し、理を得て言を忘る。語性の空なることを知らば、此の人道を悟るなり。經に祝う、言語道断、心行処滅、と。

師の眞妄偈に曰く、眞を窮るに眞は無相、妄を窮むるに妄は無形。返觀して心を推窮するに、心も亦た仮名なりと知る。道を会すること既に此の如ければ、到頭也たかくのこしと只寧しんじ。

・到頭 つまることごとく、ひつぎょう。

照成寺の達性禅師なる有り、讚嘆して問う、其の理甚だ妙なり、眞妄双び浪び、仏道兩つながら亡ぶ。修行は性空にして、名相は不実なり。是くの如く解する時、他の衆生を断ず可からず。善惡の二根は可あに是れ菩提ならんや。師曰く、善惡二根は心に因りて有

り。心を窮めて若し有らば、根も亦た無からざらん。心を推すに既に空なれば、根は何に因りてか立たん。經に曰く、善不善は心より化生す、善惡の業縁は本と実有る無し。不実なりと雖も心と俱ならず。

師の善惡二根不実偈に曰く、善既に心より生ずれば、惡豈に心を離れて有らんや。善惡は是れ外縁、心に於いて実には有らず。惡を捨てて何処にか送らん、善を取りて誰をしてか守らしめん。傷嗟す二見の人、攀縁して両頭に走る。忽し無生の本を悟らば、始めて從前の咎を会せん。

又た土孫体虚問う、此の身は何よりして来たり、百年の後復た何処にか歸る。師曰く、人の睡る時の如き、忽然として夢を作すに、夢は何よりか来る。睡り覺むるの時、夢は何にか去る。進んで曰く、夢みる時は無しと言つ可からざるも、忽ち覺むれば有りと云つ可からず。往来有りと雖も、往来するに所無し。師曰く、貧道の身も亦た其の夢の如し。体虚は頓に此の身は実に夢に同じと悟れり。師の来往如夢偈に曰く、夢に在るが如しと知ると亦も、睡裏には實に是れ聞し。忽ち覺むれば万事休止、還つて睡時の覺に同じ。智者は夢と悟るを会し、迷人は夢の聞しきを信ず。夢なりと会すれば両般無く、一悟にして別悟なし。富貴と貧賤とに、更に亦た別道無し。

師は上元三年五月五日に遷化せり。春秋九十五なり。大暁禪師と勅諡す。

一宿覺和尚、六祖に嗣ぐ、温州に在り。師諱は玄覺、字は道明、俗姓は戴氏、温州永嘉県の人なり。内外博通し、耕鋤せざるを食い、蚕口ならざるを衣る。平生の功業は人の測る所には非ず、曾つて温州の開元寺に在りて親母に孝順なりき。兼ねて姉有り、二人に侍奉せり。合寺合廓の人、其の僧を誘れり。一日有りて親母下世せり。麻を著けて未だ姉を抛たず。又た更に人に誘らるることを被るも、其の僧は觀得すること能わず。

有る一日、廊下にて一禪師の号して神策と曰い、年は六十有余に近きを見たり。弟姉兩人、簾を隔てて其の老宿を見る。姉は却つ

て弟に向つて曰く、老宿を屈して房裏に帰せしめ、茶を喫せめん、還た得たるや、と。弟便ち出で来たり、其の老宿を屈せり。老宿は入らんと欲得せざるも、其の僧の苦に切なるを見て、老宿は之を許せり。老宿、房裏に去くに、女出で来たつて相看して曰く、小弟弟容易に乞う。老宿、恠しむこと莫れ、と。便ち老宿に対して坐し、又た弟をして坐せしむ。三人説話する次いで、老宿、其の僧の気色の常人に異なり、又た女人も亦た丈夫の気有るを見て、老宿は其の僧に勧めて曰く、孝順の事は自より是れ一路なり。仏理を明らかむると雖も未だ師印を得ず。過去の諸仏は聖聖相い伝え、仏印可せり。釈迦如来は燃燈授記す。若し然らざれば即ち自然に墮せん。南方に大聖有り、号して慧能禪師と曰う。往きて礼足して師と為す可し、と。僧対えて曰く、昨者、母親下世し、只だ姉のみ有り、独自にして人の看待する無し、争でか抛ち得ん、と。姉却つて弟に向つて説く、弟よ我を疑うこと莫れ、某甲は独自の身、取次に寄住し得ん。但自去け、と。弟の僧は此れより装裏し、却つて寺主の処に去き、具さに前事を説けり。寺主曰く、師兄の若きのこの善心、某甲身自らは去き得る能わざるも、某も相い共に善因を造らん。師兄但だ去け。其の姉を愁つること莫れ、某甲孝順せん。但だ喚びて他の房裏に來たらしめよ、と。其の僧一一他の寺主の処分に依り、姉を喚びて寺主の房裏に去かしめ、安排し了つて便ち発し去れり。

- ・ 屈 曲げてお越しなげう。
- ・ 容易 心易く、おいそれと。
- ・ 下世 世を去る。
- ・ 取次 場当たり。
- ・ 処分 いいつけ。
- ・ 安排 配置する。

其の弟の僧は年は三十一に当たる。進遷して往きて始興県の曹溪山に到れり。恰も大師の上堂するに遇い、錫を持して上り、禅床

を遶ること三市して立つ。六祖問う、夫れ沙門なる者は三千の威儀、八万の細行を具し、行行虧くること無くして名づけて沙門と曰う。大徳、何方よりして来たりて大我慢を生ずるや。对えて曰く、生死事大、無常迅速なり。六祖曰く、何ぞ無生を体取して、本と無速なるに達せざるか。对えて曰く、体は本と無生、達すれば即ち無速なり。祖曰く、子は甚だ無生の意を得たり。对えて曰く、無生に豈に意有らんや。祖曰く、意無くんば誰か能く分別せん。对えて曰く、分別するも亦た意に非ず。祖曰く、如是、如是。

時に大衆千有余人皆な驚然たり。師は却つて東廊下に去きて掛錫し、威儀を具して便ち上りて礼謝し、默然として撃自して出で、便ち僧堂に去きて衆に参じ、却つて上来して辞せり。祖曰く、大徳、何方より来たりて返ること太だ速きや。对えて曰く、本自動くに非ず、豈に速きこと有らんや。祖曰く、誰か動くに非ざるを知る。对えて曰く、仁者自ら分別を生ずるのみ。祖師一跳して下り来たり、背を撫でて曰く、善い哉、善い哉。手の干戈を執る有り。小留一宿するにみにして来朝辞せり。祖師禪師、衆を領して其の僧を送れり。其の僧、行くところ十歩来にして振錫三下して曰く、一たび曹溪に見えしより後、生死の相い干わらざるを了知せり、と。

其の僧歸り来たるに、名号先ず衆人の耳に播き、直に不可思議の人なりと道えり。収過する者無数にして、供養する者一ならず。此れより所有る歌行偈頌、皆な是れ其の姉の集むるなり。師は先天二年十月十七日に遷化せり。春秋三十九なり。無相大師浄光の塔と勅諡す。

・ 収過　あやまちを詫びる。

懷讓和尚、六祖に嗣ぐ、南岳に在り。姓は杜氏、金州の人なり。初生の時、六道の白氣有りて上像に応ぜり。儀鳳二年四月八日生れ、此の瑞氣を感じり。刺使瞻見して高宗に奏聞す。帝曰く、此の気は何の瑞ぞや、と。太史曰く、国の法宝は俗貴に染まるに非ずして、安康金州の分野に在り、と。時に金州太守韓偓、具さに録して奏上す。帝曰く、僧瑞宜しく善慶を加うべし、と。韓偓に勅して、親しく往きて存毓し、厚賜もて安慰せしむ。是の時杜氏は名づけて光奇と曰う。家内に三子有り。三子中に於いて其の瑞に應じて生まれし者は、年近かに五歳にして炳然として殊異し、心の恩讓を懷きて与に競わず、父母は之を号して名づけて讓子と為せり。十

載に至りて唯だ仏縁をのみ愛でたり。三載玄靜なる有り、舎に過ぎりて説法し、光奇に告げて曰く、此の子は出家の後、当に上乘の至幽至微を獲て仏理を会すべし、と。垂拱四年、年始めて十五にして父母を拜辞し、荊州玉川寺に往きて弘景律師に事え、八年を経たり。便ち懷讓、通天元年四月十二日に至り、当寺に於いて受戒せり。久視元年七月十八日、自ら嘆じて曰く、我れ受戒して今に五夏を経、広く威儀を學びて有表を蔽にす。眞理を思わんと欲するも而も焉に契うこと難し、と。又た曰く、夫れ出家なる者は無為法の爲にし、天上人間に勝る者有る無し、と。時に坦然禪師なる有り、讓の嗟嘆するを覩て乃ち雲遊して、博く先知に問わんことを命ぜり。嵩山安和尚の処に至り、坦然は西來意の話を問えり。坦然便ち悟り、安和尚に事えたり。

師乃ち曹溪に往き、而して六祖に依れり。六祖問う、子は近ごろ何方を離れしや。對えて曰く、高山を離る。特に來たりて和尚を礼拝す。祖曰く、什摩物か与摩に來たる。對えて曰く、一物を説似すれば即ち中らず。

・説似 …… について言つ。

左右に在ること十二載、景雲二年に至り、祖師を礼辞す。祖師曰く、一物を説似すれば即ち中らざるは、還た修證を偈るや。對えて曰く、修證は即ち無からざるも、敢えて汚染せず。祖曰く、即ち這个の汚染せざる底は是れ諸仏の護念する所なり。汝も亦た是くの如く、吾も亦た是くの如し。西天二十七祖般若多羅記すらく、汝が仏法は汝が辺より去りて、向後、馬駒の天下人を踏殺せん、と。汝は速やかに此の法を説くこと勿れ、病汝が身に在り。

馬和尚、一処に在りて坐す。讓和尚、埽を將ち去きて、面前の石上に磨す。馬師問う、什摩をか作す。師曰く、鏡と作す。馬師曰く、埽を磨して豈に鏡と成すことを得んや。師曰く、埽を磨して尙お鏡と成らず、坐禅して豈に仏と成ることを得んや。馬師曰く、如何にすれば即ち是ならん。師曰く、人の車を駕するが如き、車若し行かざれば、車を打つ即ち是なるか、牛を打つ即ち是なるか。師又た曰く、汝は爲た坐禅を學ぶや、爲た坐仏を學ぶや。若し坐禅を學ばば、禅は坐臥には非ず。若し坐仏を學ばば、仏は定相には非

ず。法に於いて住する無く、取捨す可からず、何をか之を為さん。汝若し坐仏せば、却つて是れ仏を殺す。若し坐相に執すれば、解脱の理には非ざるなり。馬師は師の所説を聞き、座よりして起ち、礼拝して問うて曰く、如何んが用心すれば即ち禪定無相三昧に合せん。師曰く、汝の心地の法を学ぶは猶お種を下すが如し。我の法要を説くは、彼の天沢に譬つ。汝の縁合するが故に当に道を見るべし。

又た問う、和尚は道を見る、当た何の道を見るや。道は色に非ざるが故に、云何んが能く観る。師曰く、心地の法眼能く見る。無相三昧も亦復然り。馬師曰く、可に成壞すること有りや。師曰く、若し道に契えば、無始無終、不成不壞、不聚不散、不長不短、不静不乱、不急不緩なり。若し是くの如く解せば、当に名づけて道と為すべし。汝は吾が教えを受けたり。吾が偈を聴け。曰く、心地は諸の種を含み、沢に遇わば悉く皆な萌えん。三昧は花無相、何ぞ壞し復た何ぞ成ぜん。

大徳有りて問う、鏡もて像を鑄るが如き、像成りし後、鏡明は何摩処に向つてか去る。師云く、大徳の未だ出家せざる時の相状の如きは何摩処に向つてか去れる。進んで曰く、像と成りし後は何摩と為てか鑒照せざる。師曰く、鑒照せざると雖然も、他を讓ること一点もし得ず。

師は天宝三年八月十二日に歿せり。大慧禪師最勝輪の塔と勅諡す。

祖堂集卷第三

